

省略

英文において、(本来あるべき文中の)ある一部が省略されてしまうことがあります。どのような場合に省略というものが起きるのか、そしてそこに省略されている語(句)は何なのかがわからないと、いつまでたっても英文を読みこなすことはできません。省略は文法問題だけでなく解釈においても重要なマスターしておくべき単元です。まず、省略には2種類あります。

1.慣用的な省略

2.同じ形の反復(繰り返し)を避けるための省略

それぞれを詳しく見ていくことにしましょう。

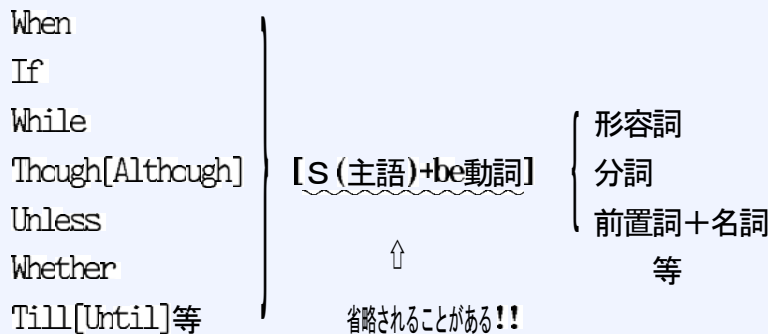
レクチャー1

慣用的な省略

(1)副詞節内での「S(主語)+be動詞」の省略。

以下のような副詞節を導く従位接続詞の後ろの「S(主語)+be動詞」は省略されてしまうことがあります。

※従位接続詞とは簡単に言うとand, but, or, for以外の接続詞のこと。



このような省略が起きるのは、以下の2つの条件が揃った場合です。

①そのS(主語)が、主節の主語と同一である

※主節とは、(従位)接続詞・関係詞・疑問詞等のついていない(裸の)「S+V」のこと。

②そのbe動詞の時制が、主節の動詞の時制と同じである

以下の例文を見てください。

(ex) While I was walking on the street, I met an old friend of mine.
通りを歩いていたら、古い友人の一人に会った

while(が導く)節、主節共に主語は I、動詞の時制も共に過去時制です。上記の2つの条件が揃っているなので、この英文は以下のように I was を省略できます。

→ While walking on the street, I met an old friend of mine.

^

逆に解釈問題等では、従位接続詞に直接「形容詞」「副詞」「前置詞+名詞」「分詞」等がくっついた構造を見かけたら、従位接続詞の後ろに

『S(主語)+be動詞』

が省略されているのではないかと頭をこれからは働かせるようにしましょう。

會例外的に上記のルールが当てはまらない副詞節内の「S+be動詞」の省略もある。以下にその例を挙げておく。

①過去と現在を対比させたような英文では、主節の動詞と副詞節内の be 動詞の時制が異なる場合も、例外的にあり得る。

(ex) I am happy now though (I was) unhappy in childhood.

②以下の場合、副詞節内の主語と主節の主語が違って省略することがありうる。

1. 「when necessary(必要な場合には)」のような慣用的な表現

(ex) when(ever) possible :可能な場合には(いつでも)

whenever necessary :必要な場合にはいつでも

if possible :もし可能ならば

if necessary :もし必要ならば

この場合 it is が when(ever), if の後ろに省略されている。

2.副詞節内の主語が「一般の人」を表す you[we, one]の場合。

(ex) While (you are) driving, it is important to drive safely.

運転する際には、安全運転することが大切だ

③品詞的には副詞なのだが、however[=no matter how]の後ろの「S+be動詞」も省略されることがある。

(ex) However great or successful (he may be), no one is ever as free as a bird.

どんなに偉大であっても、またどんなに成功していても鳥のように自由な人間はいない

However small (it is), every effort will count in the end.

どんなにささやかであれ、努力を重ねれば結局は成果が出るものだ

(2)疑問詞関連の省略。

①How come S+V~?

how come S+V~?は、元々 How did[does] it come about that S+V~? からきた省略(会話のくだけた表現)で「どうして」「なぜ」という驚きを表します。come の後ろが「S+V」の語順になるのがポイントです。

Why+疑問文の語順? や What+疑問文の語順+for? で言い換えることができます。

(ex) How come you were absent from school yesterday?

なぜ昨日学校を休んだの

=Why were you absent from school yesterday?

=What were you absent from school yesterday for?

「What+疑問文の語順+for?」で「なぜ~?」「何のために~?」も頻出表現です。

下は「何のために~?」という場合の例文です。

(ex) What is this used for? これは何のために使われるのですか

それから、会話などでは "How come?(どうして)"と、単独で使われることもあります。これは why や what ~ for にしても同じです。

(ex) A: I won't be able to attend the party. パーティには出れないよ

B: How come?

どうして

=Why?

=What for?

②What if S+V~?

1.What would[will] happen if S+V~?の省略形として。

(a)[提案]「~したらどうか」

(ex) What if you move the desk a little?

机を少し動かしたらどうだろうか

(b)[問いかけ・不安]「(主に好ましくないことが)~したらどうなる(する)だろうか」

(ex) What if it rains? 雨が降ったらどうするの

2.What does it matter if S+V~?の省略形として。

「~してもかまうものか」「~だとしたらどうだというのだ」

(ex) What if I fail the exam? 試験に落ちたってかまうものか

③Why not?

1.[禁止・拒絶・否定などの文への応答として] どうしていけないのか

(ex) A: You shouldn't smoke. たばこを吸ってはいけない

B: Why not? どうして(だめなの)

2.[許可・勧誘を意味する質問に対して同意を表して] もちろんさ、いいとも


(ex) A: Let's go. さあ行こう

B: Why not? もちろん

④So what? だからなんだ(どうした)というのだ?

(ex) A: You drink too much. 飲みすぎだよ

B: So what? だから何だってんだよ

⑤Guess what! ねえねえ  会話で、びっくりするような話を切り出すとき等の表現として用いる。what の後に happened が省かれていると考えるといい。

(3)本来繰り返しを避けるための省略だが、慣用的に用いられるもの。

以下に挙げる表現は、本来は繰り返しを避けるための省略だったものが、今では一種の慣用句、つまりイディオム的に用いられるようになったものです。ですからこれらは決まり文句として覚えてもらってもかまいません。

① seldom[rarely]の後の if ever は「たとえあるにしても」と訳す。

(ex) She seldom, if ever, go to the movies.

彼女は(たとえ行くことがあるとしても)滅多に映画に行かない

seldom[rarely]の後ろで if ever がカンマにはさまれて挿入的に用いられることがあります(あえて和訳に出す必要はない)。if の後に省かれた「S+V」は主節の「S+V」と同一です。

更に、この if は even if の意味、つまり「たとえ～だとしても」です。

したがって、上記の例文の if ever は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if ever = even if she ever goes to the movies

たとえ彼女が少しでも映画に行くことがあるとしても

② if at all は「たとえ～だとしても」と訳す。

(ex) He can recall the scene but vaguely if at all.

彼はその光景がたとえ思い出せるにしてもごくぼんやりとだ

上記の例文の if at all は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if at all = even if he can recall the scene it at all

たとえ少しでもその光景を思い出せるとしても

at allは条件文では「少しでも」という意味になります。

③ A, if not B は「BではないにしてもA」と訳す。

(ex) What he said was accurate in many, if not most, respects[点].

彼の言った事は、ほとんどではないにしても多くの点で正確だった

上記の例文の if not は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if not = even if what he said was not accurate in most respects

また、A, if not B は if not B, A で言い換えることもできます。

⚠AとBは構造的に等しくなる(内容的にも「A⇔B」)。ただし「BでなければA」という意味になることもあるので注意。

④ if not は「もしそうでないなら」と訳す。

(ex) You'd better leave now, if not you'll miss the bus.

今すぐ出かけた方がいい。そうしないとバスに乗り遅れるぞ

上記の例文の if not は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if not = if you do not leave now

⑤ if so は「もしそうなら、もしそれが事実なら」と訳す。

(ex) He might set out on a trip next week. If so, we won't be able to see him.

彼は来週旅行に出かけるかもしれない。もしそうなら彼には会えないな

⑥ if any には、there is[are] が省略されている。

1. little[few] if any は「たとえあるにしてもほとんど~ない」と訳す。

(ex) There is little, if any, difference between the two.

両者の間にはたとえあったとしてもごくわずかしか違いはありません

上記の例文の if any は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if any = even if there is any difference between the two

2. if any で「もしあれば」と訳す。

(ex) Correct errors, if any. もしあれば誤りを訂正せよ

上記の例文の if any は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if any = if there are any errors

⑦ if anything は「どちらかと言えば(言うとは)」と訳す。

(ex) If anything, she works too hard. どちらかと言うと彼女は働きすぎだ

上例のように「どちらかといえば」と訳すことが多い(特に文頭の場合)ですが、それ以外に「たとえあっても(あるとしても)」と訳す if anything もあります(これもあまり和訳に出す必要はない)。

(ex) In those days I had little, **if anything**, money.

その当時私は(たとえあっても)ほとんど金を持っていなかった

(4)仮定法における「if」の省略。

仮定法の if は省略することもできます。ただ、**if が省略されると、条件節は「疑問文と同じ語順」になります。**以下にその例をあげてみました。

(ex) **Were I a bird**, I would fly to you.

=If I were a bird, I would fly to you.

もし僕が鳥なら、君の所に飛んでいくのに

Had I had more money, I would have bought it then.

=If I had had more money, I would have bought it then.

もしもっとお金を持っていたなら、その時それを買っていたのだが

Were he to come here, what would he say?

=If he were to come here, what would he say?

もし仮に彼がここに来たら、何というでしょう

Should it rain tomorrow, the picnic will be put off.

=If it should rain tomorrow, the picnic will be put off.

もし万一明日雨が降れば、ピクニックは中止になるだろう

(5)「要求」「提案」「命令」「決定」を表す動詞、形容詞の後の**that**節内では「**should+V【原形】**」が用いられるが、この **should** は省略されることがある。

1. **S + Vt + that S + (should) + do【原形】**。

○

※下線を引いた語は頻出。

- ↑
- ①要求(**demand**「要求する」, require「要求する」, ask「要求する」, request「要求する」
insist「要求する、言い張る」, urge「要求する、言い張る」等)

④urgeには「～するよう(熱心に)勧める」という、「提案」の意味もあり。

- ②提案(suggest「提案する」, propose「提案する」, advise「忠告する」, recommend「推薦する」等)
- ③命令(command「命令する」, order「命令する」等)
- ④決定(decide「決定する、結論を下す」等)

(ex) He **insisted** that I (should) **pay** the bill.

彼は私がお金を払うよう言い張った

2. 形容詞 + that S+[should]+do[原形]～.

※下線を引いた語は頻出。

↑
necessary「必要な」, urgent「緊急に必要な」, important「重要な」, essential「不可欠な」
desirable「望ましい」, crucial「極めて重要な」, vital「極めて重要な」, advisable「望ましい」
imperative「絶対必要な」

繰り返しになりますが、要するにこのタイプの形容詞は、「何かかなされなければならない」とか「重要である」といった(相手に対する要求・勧告・願望を含蓄する)意味のものです。

(ex) It is **necessary** that you (should) **pack and leave** at once.

君はすぐに荷作りして出かける必要がある(→出かけた方がいい)

(6)その他。

これ以降は、あまり文法問題で取り上げられることはありません。ただ読解などで必要になることもあるので一応紹介しておきます。

①分詞構文における「being」「having been」は省略されることが多い。

(ex) (Being) Tired with the labor, I went to bed at once.

仕事に疲れたので私はすぐに床に就いた

(Having been) Taught French since her childhood, she is very good at French conversation.

子供の頃からフランス語を教わっているので、彼女はフランス語会話がとてもうまい

②「前置詞(句)」の省略。

1.動名詞の前の前置詞は省略されることがある。

(ex) The scientist spent his time (in) studying his field.

その科学者は自分の分野の研究に時間を費やした

I had some trouble (in) solving this problem.

私はこの問題を解くのに苦労した

He was late (in) coming home. 彼は家に帰ってくるのが遅かった

2.size, age, color 等の前の「of」は省略されることがある。

(ex) A girl (of) your age should know better.

君の年齢の女の子なら、もっと分別があつていいはずだ

Look at those houses (of) the same color.

同じ色のその家を見てご覧なさい

These houses are (of) the same size. これらの家々は同じ大きさです

⦿この of は「～の性質(特徴)をもった」という意味の of。

3.疑問詞で始まる名詞句(節)の前の「～に関して」という意味の「as to」「of」は省略されることがある。

(ex) I was at a loss (as to) what answer to make.

なんと返事したらいいのかわからなくて途方に暮れた

I had no idea (as to) what measures to take.

どう対処したらいいのかわからなかった

I am ignorant (of) when we should do that.

いつそれをすべきなのかわからない

③「冠詞」の省略。 ⦿2.だけは文法問題用に覚えておこう。

1.(学校・教会・寝床等の)「建物・場所」が、その本来の目的で用いられる場合には、冠詞は省略される(つけない)。

(ex) You have to go to [×the] college for four years.

大学には四年間(勉強するために)行かねばならない

They go to [×the] church regularly.

彼は定期的に(礼拝のために)教会に行っている

④本来の目的以外でその場所に行くという場合には、冠詞が必要。

(ex) They went to the church to meet their friends.

彼らは友人に会うためにその教会に行った

2.交通(通信)手段を表す前置詞の by の後では、冠詞は省略される(つけない)。

(ex) by [xan] air 飛行機で

by [xa] bicycle 自転車で

by [xa] ship 船で

by [xa] bus[car] バス[自動車]で

by [xan] e(-)mail Eメールで by [xa] fax ファックスで

④by the[a] trainなどは言わないので注意。

3.「職務」や「地位」を表す名詞がC(補語)になる場合、冠詞は省略される。

(ex) They elected George (the) captain of the club.

私たちはジョージをクラブのキャプテンに選んだ

Mr. Smith is (the) principal of our school.

スミス先生は我々の学校の校長だ

④唯一の、あるいは特殊の目立った職務や地位を表す名詞にはふつう冠詞をつけない。ただし the をつけることもある。

「～として」という前置詞の as の後に、唯一の役職などを表す語がくる場合も、ふつう無冠詞。ただし冠詞をつけることもある。

(ex) Who will act as (the) principal? 誰が校長代理をするのか

As (the) Prime Minister, he has the final say as to the problem.

首相として彼には最終的にその問題についての最終的な決定権がある

4.「名詞+as+S+V:SはVだけれど」の構文では文頭の冠詞は省略される(つけない)。

(ex) [xA] Child as he was, he knew what to do first.

彼は子供だったけれども、まず何をすべきか知っていた

④ A child as he was, とは言わないので注意。

④「接続詞」等の省略。

(ex) I thought (that) you came to see me yesterday.

僕は君が昨日僕に会いにくると思った

☞ think, suppose, believe, know等の目的語になる節を導く接続詞のthatは、よく省略される。
省略されると「S+V S+V～」という構造になる。

(It is) No wonder (that) such a wise man should succeed.

そんな賢い男が成功するのは不思議ではない(もつともだ)

☞「No wonder S+V～」という形は会話文でよくみられる。

Now (that) you are old enough, you should know better.

(今は)もう大人なんだから、君はもっと分別があつてしかるべきだ

☞「Now that S+V～:今はもう～なので」。

The English teacher had so many students (that) he could not remember their faces.

その英語の先生はとてもたくさんの生徒を持っていたので、彼らの顔を思い出すことができなかった

☞「so～that S+V…:とても～なので…」のthatはよく省略される。

He stepped aside so (that) the child could pass.

彼はその子供が通れるようにどいてあげた

You should study hard (so) that you will be able to succeed in the exam.

君は試験に通ることができるよう、一生懸命勉強すべきだ

☞「so that S may[can/will] V～:Sが～するために」のsoやthatもよく省略される。

⑤最上級やif節の前の「even」の省略。

(ex) (Even) The wisest man does not know everything.

どんな賢い人でも、全てのことを知っているわけではない

(Even) If the sun were to rise in the west, my love would never change.

たとえ太陽が西から昇ったとしても、僕の愛は変わらない

☞上例のように、最上級やif節がそのままでは日本語としておかしい場合には、「even」を補ってみるといい。

⑥「関係代名詞(目的格・主格・主格補語等)」「関係副詞」の省略。

1.関係代名詞の目的格は省略できる。

(ex) We should make use of the knowledge (which) we acquired in book.

我々は本から得た知識を活用すべきだ

2. There is/ Here is で始まる文では関係代名詞の主格も省略できる。

(ex) There is no one in my class (who) can sing a song so well as she.

うちのクラスで彼女ほど歌がうまい人はいない

3.関係代名詞節内が there is/here is で始まる文では、関係代名詞の主格も省略できる。

(ex) This is the most beautiful flower (that) there is in my garden.

これは僕の庭にある最も美しい花です

4.「It is S who[that] V～」という形の強調構文では who[that] は省略できる。

(ex) It is the man (who[that]) kill her. 彼女を殺したのはその男だ

5.主格補語も省略可能。

(ex) I am not the young little girl (that) I once was.

私は昔の小さな少女ではありません

6.連鎖関係詞節をつくる関係代名詞も省略可能。

(ex) I employed the person (who) I thought was honest.

私は、正直だと思う人を雇った

7.関係副詞に関して。

(a)先行詞が the place, the time, the reason の場合、関係副詞自身又はその先行詞を省略することができる。

(ex) This is the place where I live now.

ここが私が今住んでいる場所です

=This is the place I live now.

=This is where I live now.

(b)関係副詞の how は、先行詞(the way)、もしくは how 自身を必ず省略しなければならない。したがって「the way how S+V～」という形はない。

(ex) This is how they solved the problem.

そういうふうにして彼らはその問題を解決した

=This is the way they solved the problem.

×This is the way how they solved the problem.

⑦「関係代名詞+be動詞」の省略。

(ex) Those (who were) present were impressed with the story.

出席していた人々はその話感動した

⑧所有格の後に「場所」「建物」を表す名詞が来る場合、その名詞は省略される。

(ex) I went to the barber's (shop) yesterday. 昨日床屋に行った

⑨不定詞の to の省略。 ☞この2つの構文も、作文用等に覚えておくといい。

1. 「help+O+to do[原形]～:Oが～するのを手伝う」の to は省略されることがある

(ex) He helped me (to) do my homework. ☞ toは省略せずにおいてもいい。

彼は私が宿題をするのを手伝ってくれた

2. 「All S can[have to] do is (to) do[原形]～」の to は省略されることがある

(ex) All you have to do is (to) finish your job.

君は自分の仕事を終えさえすればいい

☞toが省略できるのは、is[was]の前にdoがある場合のみ。それ以外の一般動詞の場合は、toは省略しない。

(ex) All I can give you is to say "Good luck".

「幸運を祈ります」としか言えません

⑩ 「To think (that) S + V ~ !: ~だなんて(本当に残念だ、バカだ)」。

(ex) To think that such a promising person like him should have died so young!

彼のような前途有望な人間がそんなにも若くして死んだなんて(本当に残念なことだ)

☞これは「What a pity it is」、又は「What a foolish thing it is」が to think の前に省略されていると考えられる。

⑪ 「the+比較級 S + V ~, the+比較級 S + V...」の構文における省略。

1. 「the+比較級 S + V ~, the+比較級 S + V...」の構文で「V」が be動詞や become の場合、その be動詞 (become) は省略されることが多い。

(ex) The larger the audience (is), the better the profit (is).

聴衆がたくさんであればあるほど、利益は上がる

2. また決まり文句的に the+比較級の後ろの「S+V」が省略されるものもある。

(ex) The sooner (you do it), the better (it will be).

早ければ早いほどいい

⑫ 否定の原級比較・比較表現で、「as ~」「than ~」が全て省略されている場合の補い方。

1. 動詞が現在完了時制ならば ☞ 「今ほど」を補ってみる。

動詞が過去完了時制ならば ☞ 「そのときほど」を補ってみる。

2. それの時制以外ならば ☞ 「これほど」を補ってみる

☞ 「これ」が何を指すかは文脈から判断する。

(ex) I have never been so happy.

※上記の英文は完了時制なので「今ほど」を補って訳してみる。したがって「今ほど幸せだったことはない」となる。

(It) Couldn't be better.

※上記の英文は完了時制ではないので「これほど」を補って訳してみる。したがって「これほど良いものはない

→ (これは)最高だ」となる。だから Couldn't have been better. は「これほど良いものはなかった → (これは)最高だった」となる。

繰り返しを避けるための省略。

(1)等位接続詞(and, but, or等)や比較の as や than の後ろの省略。

繰り返しを避けるための省略が最も起きやすいのは、等位接続詞(and, but, or等)や比較の as や than の後ろです。その理由は、等位接続詞(and, but, or等)や比較の as や than の後ろ(右側)では、前(つまりその左側)で書かれた内容(語句)が反復されることが多いからです。

したがって等位接続詞や比較の as や than の後の意味がうまくつかめないという場合、まずこのタイプの省略があるのでは、と考えるといいでしょう。具体例を1つ挙げてみましょう。

Some boys like baseball and others football.

上の波線部に注目してください。

①and の右側にある

②文の構造的に不完全でこの部分だけ取り出してみた場合、意味が不明

以上の点から、波線部には繰り返しを避けるための省略がなされていると判断できます。

このような場合、同構造になっている(等位接続詞の)その直前の文(箇所)を参考に、繰り返しによる省略によって生じた「不完全な形」を元の「完全な形」に戻してみればよいのです。そこで上例を、and の左側を参考に省略された語句を探してみます。すると、

<u>Some boys</u>	<u>like</u>	<u>baseball</u>
⑤	⑥	○
and		
<u>others</u>	<u>(like)</u>	<u>football.</u>
⑤	⑥	○

こうして両者を並列させれば、others の後ろに⑥、つまり like が省略されていることがわかるわけです(like を補って全体を訳せばいい)。訳は「野球が好きな少年もいればサッカーが好きな少年もいる」となります。

この種の例を他にいくつか挙げてみましょう。

(ex) She studied ceramic art in Japan and (studied) painting in Paris.
彼女は日本で陶芸を、パリで絵を学んだ

He was searching for something but I don't know what (he was searching for).

彼は何かを探していたが、何を探していたのかは私にはわからない

Mr. Yamane teaches us history and Mrs. Sato (teaches us) English.
山根先生は私たちに歴史を、佐藤先生は英語を教えてくれている

Jack is a man of learning, but (Jack is) not of practice.
ジャックは学問はあるが実践力はない

Sumiko sings better than she used to (sing).
すみ子さんは、以前より上手に歌います

(2)代不定詞。

繰り返しを避けるための省略は、等位接続詞や as, than の右側以外でも、(同語の反復があれば)起こり得ます。たとえば、to不定詞の後にくるべき動詞の原形部分が、直前の文(節)の動詞(+目的語等)と繰り返しになる場合、to不定詞の to だけを用いる(それ以降は省略する)ことがあります。これを代不定詞といいます。

(ex) If you don't want to come here, you don't have to.
もしここにきたくなければなくていい

上の英文では、文末の to の後ろに come here が本来くるべきなのですが、繰り返しになるために省かれています。

(ex) A: Could you do me a favor? お願いがあるんですが
B: I'd be very happy to. 何なりと

上の英文では、文末の to の後ろに do you favor が本来くるべきなのですが、繰り返しになるために省かれています。

(3)that節の代用。

これがよく問題として問われるのは「I hope so[nct]」「I'm afraid so[nct]」の2つです。hope は、「(望ましい事を)思う」という意味。be afraid は、「(望ましくない事を)思う」という意味なので、当然ですが、hope の後ろには「(話者にとって)望ましい内容」が、be afraid の後ろには「(話者にとって)望ましくない内容」がきます。

そしてこの I hope や I'm afraid の後ろの that節が、so や not で代用されることがあるのです。その使い分けは以下の通りです。

- ①本来 hope/be afraid の後ろに来るべきthat節が肯定文であれば、(その肯定の that節は) so で言い換えることができる。

A:Will he get well soon?

B:I hope that he will get well soon.

上の例文の波線部は、肯定の that節ですから so で言い換えることができ、Bのセリフ全体は I hope so. と表現することができます。

では逆に、下の英文の so は、元々どのような文だったのでしょうか?

A:Will she cry again?

B:I am afraid so.

so ということは、肯定の that節の代用ということになるので、直前の英文に thatを補って肯定の that節にしてみればいいのです。すると

so = that she will cry again

とわかります。

- ②本来 hope/be afraid の後ろに来るべきthat節が否定文であれば、(その否定の that節は) not で言い換えることができる。

A:We are planning to go on a picnic. Will it rain tomorrow?

B:I hope that it will not rain tomorrow.

上の例文の波線部は、否定の that節ですから not で言い換えることができ、Bのセリフ全体は I hope not. と表現することができます。

では逆に、下の英文の not は、元々どのような文だったのでしょうか?

A: Will he get well soon?

B: I am afraid not.

not ということは、否定の that 節の代用ということになるので、直前の英文に that を補って否定の that 節にしてみればいいのです。すると

not = that he will not get well soon

とわかります。

もちろん so/ not は、hope/ be afraid 以外にも、think, suppose[思う], expect[予想する], guess[推測する], believe 等の後ろにも置くことができます。使い方は、上記と基本的に同じです。ただし、

I **think**[suppose, expect, believe, guess] **not**.

は I **don't think**[suppose, expect, believe, guess] **so**. で書き換えられるのに対して **hope/ be afraid** は「I **don't hope so.**」「I'm **not afraid so.**」とは言えません。この点は要注意です。

共通関係

レクチャー

共通関係とは。

次の英文を見て下さい。

(ex) It may or may not be true.

それは本当かもしれないし、そうでないかもしれない

この英文は、本来なら It may be true or (it) may not be true. となるべきものが、それでは英文が長く、またくどくなるので、繰り返し部分を省いた結果、上のようになったと考えられます。

$$\text{It} \left\{ \begin{array}{l} \text{may} \\ \text{or} \\ \text{may not} \end{array} \right\} \text{be true.}$$

と分析することができます。

このように1つの語(句)が2つ(以上)の語(句)のどれにも同じようにかかって、共通要素を省略した結果、本来、「ax+bx」となるべき構造が、「(a+b)x」という形になってしまう場合があります。この時、aとbはxに対して共通(の)関係にあるといい、この形式を共通構文といいます。上の英文の場合 be true が共通語句(x)で may と may not がそれぞれ a, b にあたります。

この共通構文(関係)には、大きく分けて次の2つの型があります。

2. 「(a+b)x」型の共通関係。

これは、要するに共通語(句)が後に置かれているものです。

(ex) I want to know the time and the place of the next meeting.

上の英文では、a, b にあたるのが the time と the place で、共通語句(x) が of~meeting になります。

I want to know
V

{	the time	}	of the next meeting .
	and		
}	the place	{	

○

(ex) Jack and Ruth have led a kind of cat and dog life for years.

ジャックとルースは長いあいだ犬猿の仲だった

上の英文では、a, b に当たるのが主語の Jack と Ruth で、共通語句(x)が動詞の have led になります。

(ex) I saw Lake Biwa on my way to and from Kyoto.

京都への行き帰りに琵琶湖を見ました

上の英文では、a, b にあたるのが to と from で、共通語句(x)が Kyoto 。

3. 「x(a+b)」型の共通関係。

これは、要するに共通語句が前に置かれるものです。

(ex) She was seen to enter the department and to buy a jewel.

上の英文では共通語句(x)が seen で、a, b にあたるのが to~department と to~jewel です。

She was seen	{	to enter the department
		and
		to buy a jewel.

(ex) George was, and is, a black sheep in his family.

ジョージは一家のやっかい者だったし、今もそうだ

上の英文では、共通語句(x)が主語の George で、a, b にあたるのが was と is です。

(ex) Water turns into ice at 0° C and into steam at 100° C.

水は摂氏0度で氷になり，摂氏100度で水蒸気になる

上の英文では、共通語句(x)が turns で、a, b にあたるのが into~0° C と into~100° C になります。

挿入

レクチャー

挿入について。

英文中の様々な箇所に、カンマ(,)やダッシュ(―)等によってはさまれて語(句・節)が挿入されることがあります。解釈においてはそのような挿入語(句・節)はいったん()でくくってしまうと、文の骨組みがグッと浮かび上がってきますね。以下に英文中に挿入される様々な語(句・節)の種類をまとめてみましょう。

2. 英文中にカンマやダッシュを用いて挿入される様々な語(句・節)の種類。

(1) 名詞(句・節)。

挿入部分が名詞(句・節)の場合、たいていは(同格として)前の名詞を説明している(言い換えている)と見ていいでしょう。

(ex) Two passengers, an American and a Japanese, were killed in the accident.

アメリカ人と日本人の2人の乗客がその事故で亡くなった

上の英文でも、下線部は主語の Two passengers の言い換えですね。

(2) 関係詞節。

挿入部分が関係詞節の場合は、それは前の名詞を説明していると見ていいでしょう。

(ex) My dog, whose color is white and black, loves me much.

うちの犬は白黒のブチだが私のことがとても好きだ

上の英文でも、下線部は主語の My dog を説明していますね。

(3)副詞(句・節)。

以下の語句・節が挿入されていた場合、その部分は副詞として主節や動詞を修飾しています。

①分詞構文。

(ex) The same thing, happening in the crowded place, would be a disaster.

もし混み合った場所で起きていたならば、同じことが惨事となるだろう

分詞の構文意味は「時」「理由」「条件」「譲歩」のどれかを見ていい。

②「接続詞+S+V」。

(ex) We should, whether we win or lose, do our best.

勝とうが負けようが、我々は全力を尽くすべきだ

He is, as far as I know, innocent[無実の].

私の知る限りでは、彼は無実だ

③「前置詞+名詞」。

(ex) Tom, without being aware of it, became taller than I.

気付かないうちに(知らないうちに)トムは私より背が高くなった

分詞構文の「前置詞+名詞」がカンマにはさまれずに挿入されている場合には、以下のように直前の名詞を修飾していることが多い。

(ex) A girl with blue eyes approached me. 青い目の少女が近づいてきた

④イディオム的な副詞句や論理接続の副詞が挿入されていることもある。

①for example:「例えば」 ④whenever possible :「可能な時はいつでも」 ⑧to be sure:「確かに」

②however :「しかしながら」 ⑤what is 比較級 :「更に～なことには」

=though ⑥what matters worse:「更に悪いことには」

③therefore :「それ故」 ⑦what is more :「おまけに」

(ex) He is promising, to be sure, but he has little experience in life.

なるほど彼は将来有望だが、人生経験が浅い

(4)主節。

~, (S)+(V) , ~

~, ⑤+④ .

という形で、主節が文中盤や末尾に挿入されることがあります。その場合は、その部分を文頭に移動させ、元の構造に戻してみるといいでしょう。

(ex) John, it seemed, was ill.

→ It seemed (that) John was ill.

主節が挿入される場合、④(動詞)部分は「言う」「思う」「見える(seem)」「聞く(hear)」といった動詞がくることが多いです。

①I think[suppose, believe]

⑤I'm sure

☞ ⑤~⑦は「~は確実だ」という意味で、

②you know「お分かりのように」

⑥it is certain

内容的には、I thinkと同じ。

③he[she, they] said

⑦there is no doubt

④it seems[appears]

また、

~, ④+⑤ , ~

~, ④+⑤ .

と、⑤と④がひっくり返って文中や文の末尾に種節が挿入されることもあります。

(ex) "I believe" , said John, "we should participate in the meeting".

我々はその会合に出席すべきだ、とジョンは言った

→ John said, " I believe we should participate in the meeting".

このような場合、④は「言う」と訳せる動詞がくることが大半です。

同格

レクチャー1

同格とは。

同格とは、名詞(又は名詞相当語句)を、他の名詞(又は名詞相当語句)と並べて、つまり

名詞，名詞

という形で、後ろの名詞が前の名詞を補足的に説明したり、言い換えたりするという用法です。同格とは後続の名詞の格が先行する名詞の格と同じという意味。つまり内容的には両者は「イコール関係」ということです。

レクチャー2

さまざまな同格のパターン。

(1)「名詞+名詞」の同格表現。

同格の最も代表的なパターンは

名詞，名詞

と、名詞と名詞の間がカンマ(,)で区切られるものですが、カンマの代わりにコロン(:)、セミコロン(;)、ダッシュ(—)が使われることもあります。その場合、後ろには文(「S+V」の形)がくることもあります。

そして(カンマの場合も含め)このタイプの同格は「つまり」「即ち」という訳を同格の語の訳の前につけるといいことが多いのです。

(ex) Nancy, the girl who sits next to me in class, is very cute.

ナンシー、つまり授業で私の隣に座っている女の子はとてもかわいい

This cake has three layers[層]: red, yellow and brown.

このケーキは三層になっている。つまり、赤、黄、茶の三色だ

This is a free country; we can do and say anything unless [～しない限り]
we break the law.

ここは自由の国だ。即ち法律を破らない限り何をするとも言えることができる

コロン、セミコロン、ダッシュ以外にも、それらと同じ意味の that is (to say), namely, or (これらも「すなわち」「つまり」と訳す)等が間に挟まることもあります。

(ex) the youngest girl, **namely** Mary 一番年下の少女、すなわちメリー

Jack is a New Yorker; **that is**, he lives in New York.

ジャックはニュー Yorker だ。つまりニューヨークに住んでいるということだ

This is a mug, **or** cup, to drink from.

これはものを飲むためのマグ、つまりカップだ

☞「つまり、即ち」という意味の or は見落としやすい。要注意。

あるいはそのような記号や語句で区切らずに、直接名詞と名詞が連続するパターンもあります。

(ex) **We Japanese** live on rice. ☞ we と Japanese は同格になっているが、カンマなどの記号は両者の間にない。

我々日本人は米を常食にする

(2) 「名詞+名詞以外」の同格表現。

① 「名詞+名詞節(that節やwhether節[～かどうか]、if節[～かどうか]、疑問詞節等)」の同格。

以下のように、名詞とその後ろの名詞節が(内容的にイコール関係の)同格になることもあります。

名詞 + {
that S+V~
whether S+V~
if S+V~
疑問詞節

このタイプの同格の場合「**という**」という訳を名詞節の訳の後につけるといいでしょう。

(ex) He heard the news that his team had won.

彼は彼のチームが勝ったという知らせを聞いた

The question whether he should perform an operation or not
troubled him.

手術をすべきかどうかという問題が彼を悩ませた

The suggestion was made that English teaching should be
improved.

英語教育を改善しようという提案が出された

會上例のように、先行する名詞とthat節は、離れる場合もある。

會関係代名詞の that と、同格の that(これは品詞的には接続詞)の見極め方は、**関係代名詞の後ろには「(S、O、C、所有格のうちどれか一つが欠けた)不完全な文」がくるのに対して、同格の that の後ろには「完全な文」がくるという点。**

會名詞節を同格のパターンをとれる名詞は、以下の通り。

I 「思考」「認識」「発言」を表す名詞。☞要するに「言う」「思う」「知る(分かる)」から派生した名詞。

thought 「考え」 feeling 「感情」 notion 「意見・考え」

belief 「信念」 impression 「印象」 argument 「主張」

knowledge 「知識」 idea 「考え」 hope 「希望」

II 「事実(証拠・情報)」「機会・可能性」「要求・命令・提案」を表す名詞。

fact 「事実」 opportunity 「チャンス」 point 「点」 proof 「証拠」

chance 「チャンス」 possibility 「可能性」 evidence 「証拠」

② 「A(名詞)+of+B(名詞): BというA」。

「A(名詞)+of+doing~ : ~するというA」。

これは後ろのB/doing~ が、前のAの内容を説明する(言い換える)タイプの同格です。「**A=B**」「**A=doing~**」の意味関係になるのが特徴。B/doing~の後に「**という**」という訳をつけるといい。以下にいくつか例を挙げてください。

(ex) the city of Rome ローマという町 ⇨ ローマの町

the news of the team's victory チーム勝利という知らせ

his habit of smoking 喫煙という彼の習慣

上の例のように「A of doing～」という形に文中で出会ったら、「～するというA」型の同格と見なしてほとんどかまいません。

③ 「名詞+to do[原形]～」。

これは、後ろの to do[原形]～が、前の名詞の内容を具体的に説明するタイプの同格です。「名詞=to do[原形]～」の意味関係になるのが特徴です。「(する・できる)という」という訳を不定詞句につけるといいでしょう。

このタイプの同格を作る名詞は、それらを「形容詞化」「動詞化」しても後ろに不定詞を(目的語などに)とるのが特徴。例えば ability は、形容詞形の able になっても be able to do[原形]～、decision は動詞形の decide になっても decide to do[原形]～(～することに決める)と、不定詞を後ろにとります。

「名詞+to do～」の同格には、代表例として以下のようなものがあります。

ability	} + to do[原形]～	「～する(できるという)能力」
opportunity		「～する(できるという)機会」
chance		「～する(できるという)機会」
tendency		「～する(という)傾向」
attempt		「～する(という)試み」
decision		「～する(という)決断」
desire		「～したい(という)願望」

(ex) the ability to speak English 英語を話せるという能力

His ambition to become the world swimming champion was understandable.

水泳の世界チャンピオンになろうという彼の野望はもっともなことであった

④ 「文+名詞」。

これは前の文(「S+V」)の内容を、後ろの名詞一語が言い換えるタイプの同格

で、

S+V~, 名詞

という構造になります。S+V~と名詞の間には、カンマ以外にコロンの、セミコロンの、ダッシュなどがくくともあります。

(ex) He thought that she helped him finally, his one-sided belief.

彼は最終的には彼女が助けしてくれると思った。しかしそれは彼の勝手な思い込みだった。

上の英文では、前の文と his one-sided belief が同格になっています。つまり one-sided belief は前の文の言い換えです。このような「文+名詞」の同格の場合、「(挿) it is」を、同格の名詞の前に補ってあげるといいでしょう。上の英文の場合「しかしそれは(but it is)」を his one-sided belief の前に補ってあげるといい和訳になりますね。

⑤ 「副詞(句・節)+副詞(句・節)」。

(ex) Now, We are here in America. 今や、私達はここアメリカにいる
(副) (副)

上の英文では here という副詞を、in America という副詞句が同格的に説明しています。

⑥ 「節+節」。

(ex) Her life gave him the courage[動] to hope that he didn't have to obey his parents, that he could create his own future.

上の英文では、前半の that節を、後半の that節が同格的に説明しています。全体の訳は「彼女の人生は、彼は両親に従う必要はないということ、つまり彼は自分の未来を切り開くことができるということを望む勇気を与えてくれた」。